

運動指導の力量形成を視点とした模擬授業の検討(その2)

松田 泰定・木原 成一郎・村井 潤*・坂田 行平*
(2007年12月3日受理)

On the Effect of Implementation of Teaching Experience upon Development of the Capacity of Teaching Motor Skills (II)

Yasusada MATSUDA, Seiichiro KIHARA, Jun MURAI and Kohei SAKATA

Abstract. This study aims to clarify what kinds of contents are considered as important by the students who planned and carried out trial teaching of physical education, and to grasp both the contents examined in advanced and those of their reflection on trial teaching, based on case descriptions. The lesson which this study discussed was the lecture on Learning-Materials of PE during the 4th semester in 2005 at the Faculty of Education, Hiroshima University. In this lesson, mat exercises and soft volleyball were performed for trial teaching. The subjects were ninety-three students. The questionnaire was accomplished after the implementation of teaching experiences.

The results were as follows: 1) The content which the students considered as most important before the trial teaching was to grasp motor skills, and their direction and explanation of the method of motor was secondarily important. The importance of the teaching materials and teaching tools and that of keeping safety were influenced according to physical activities. In soft volleyball, keeping safety was regarded thirdly important, but fourthly important in mat exercises. 2) The analysis of the students' case descriptions showed their direction and explanation of motor and their grasp of motor skills were mutually related. Keeping safety was considered in the light of warming up before the trial teaching, but afterward, they reported that close relationship between the preparation for the lesson and its teaching contents should have been considered for keeping safety.

1. はじめに

本学部初等教育教員養成コースの体育科目の概要については、すでに木原他(2004)で示されている通りである。体育科学習材講義は、これら体育科目の中で第3セメスターの初等体育(選択必修科目)につづいて第4セメスターで開設される選択科目である。この体育科学習材講義では、以下の2つの理由から授業開設時より模擬授業が継続的に実施されてきている。

第1は、学ぶ立場から教える立場への転換を図ることにある。すなわち、教科専門科目である初等体育の授業における学部学生の体育授業に対する見方の変容の1つにあげられている「学習者から指導者への意識の転換」(松田他; 1995)を、模擬授業を通してさらに意図的に行っていくことにある。

第2は、現職教員、とりわけ教職経験の少ない現職教員から大学の授業で模擬授業を行うことへ

の要請が高いという報告(東川他; 1996)に基づきながら、教員養成段階での実践的指導力の養成を視点に、学生の資質向上に向けた授業改善を継続的に行っていくことにある。本授業では、他の体育科目との関連を図りながら、体育科における実践的指導力の基礎をなすと考えられる運動指導に関する初歩的な内容・方法についての知識を中心に体育指導に対する理解を深めることを目標にしてきている。

前報(松田他; 2005)では、体育科学習材講義で実施されたマット運動の模擬授業を対象に、学部学生の運動指導にむけた力量形成を視点に授業の効果の検討を行ったところ、以下の結果が得られた。

1) マット運動の各技に対する理解は、授業実施前からかなり高い傾向がみられたが、授業後には模擬授業で実施した技においてさらに理解が促進される傾向がみられた。

*広島大学大学院学習科学専攻

2) 各技の達成度は、授業前は技による差異がみられ、前転、後転では達成度が高い一方、側方倒立回転ではかなり低い傾向にあったが、授業後には模擬授業で実施された開脚前転、側方倒立回転の達成度が高まる傾向がみられた。

3) 技ができるようになるための技術ポイントに対する理解は、授業前には各技ともかなり低い傾向を示していたが、授業後には模擬授業で取り上げた技について理解度が顕著に高くなる傾向がみられた。

これらの結果の中でも、とくに運動指導のための技術ポイントの理解に関する顕著な意識の変化が認められた点に関しては、模擬授業を実施するために学生が事前に検討した内容に大きく依存しているものと推測される。

本研究では、体育科学習材講義において実施されたマット運動およびソフトバレーボールの模擬授業を計画・実施していくうえで、学生がどのような事項に力点を置いて順次検討しているかの実態とその具体的な検討内容、および模擬授業を行った後の反省を通して彼らが気づいた問題点を把握することを目的とした。

2. 研究の方法

1) 対象授業の概要と調査対象者

調査対象授業は、2005年度後期に広島大学教育学部の選択科目として実施された体育科学習材講義である。この授業は、火曜日と水曜日の2つの授業クラスで実施され、それぞれマット運動7時間（事前準備3時間、模擬授業4時間）およびソフトバレーボール3時間（事前準備1時間、模擬授業2時間）で実施された。調査対象者は両授業を受講した学生93名である。なお、水曜日クラスは受講生が多かったため、さらに2つのグループに分けて実施された。調査は両クラスとも授業終了時に実施された。

マット運動については、事前準備の3回の授業を通して低学年での指導内容ともなる動物歩き等のマット遊びの内容が授業の前半に実施された。また授業の後半では、各模擬授業の指導内容として設定されている前転（大きな前転を含む）、開脚前転、後転、側方倒立回転の各技に対する受講者（生徒役の学生）の技能の実態を指導者班が観察する時間にあてたり、配布した関連資料を参考

にしながら指導者班毎に指導計画や指導案の作成のための時間にあてられた。

また、ソフトバレーボールについては、マット運動の模擬授業前の3回の事前準備の時間に、指導者班に対して指導内容やスタートルール、コート設営等について説明がなされ、その後の時間は模擬授業の計画・実施のための時間にあてられた。また、ソフトバレーボールの模擬授業前の1コマを受講者全体に対して指導者班に対して行った内容とほぼ同様な内容の説明が行われるとともに、ボール操作に慣れるための練習やゲーム記録の取り方の説明と試しのゲームの実施にあてられた。

しかし、両種目とも大半の指導者班は、上記の時間内だけでは模擬授業に向け十分な検討ができなかったため、授業時間外に集まり検討を行う実態がみられた。

以上のように計画・実施された模擬授業について、それぞれの模擬授業グループ毎に、生徒班の学生は、模擬授業終了直後に、①学習活動に必要な教材・教具が事前に準備されていたか ②学習活動の手続き（運動の仕方や運動の回数など）が具体的にはっきりと計画されていたり、指示されていたか ③安全の確保に配慮されて授業が計画されていたか ④その他、授業での気づきについて、の4項目について所定のB5用紙に記述するようにした。一方、指導者班の学生は、模擬授業を計画・実施する上で特に意図したことや、工夫した点についてまとめるとともに、上記の4つの観点についてのまとめと反省を行った。その後、まず指導者班からのまとめと反省を行った後、生徒班からの質問や意見に応えるなどの意見交換を行い、最後に授業担当教員とティーチング・アシスタントの大学院生による授業全体に関するまとめが行われた。

2) 調査内容及び分析方法

① 調査内容：本授業終了時に「教材・教具の準備」「運動課題の把握」「運動の指示・説明」「安全確保」「その他」の5点について、模擬授業を計画・実施するために指導者班で重視して検討した順をあげるとともに、そのそれぞれについて「検討した事項」、「行ってみたい反省」、「改善すべき課題」を自由記述するように依頼

した。

- ② 分析方法：模擬授業を計画・実施していく上で重視して検討した事項の順位については、2つの授業クラスのそれぞれの指導者班の学生があげている順位を、マット運動とソフトバレーボール別にまとめて集計を行った。

また、具体的な検討内容、および模擬授業を行った後の反省を通して学生が気づいた問題点については、同一の模擬授業クラス（水曜日の後半グループ）に配属された5つの指導者班の学生の中から任意の1名（計5名）を選出し、その記述内容を対象に分析を行った。

4. 結果と考察

1) 模擬授業を計画・実施するうえで重視した事項の順位の全体的傾向

マット運動の模擬授業を計画・実施するにあたって指導者班の学生が重視した事項の順位は図1に示すとおりである。

まず、指導者班で最も重視して検討した事項として多くの受講生があげていたのは「運動課題の把握」であり、約75%の学生がこれを第1位にあげていた。また、これについて重視して検討した事項にあげられていたのは「運動の仕方の説明・指示」（65%）であった。これら2つの事項が模擬授業を計画・実施するうえで重視して検討されているという結果は、本授業で行われる模擬授業の目的である運動の技術指導にかかわる内容が事前に指導者班の学生によって検討されていることを示しているといえる。同時に、この結果は、本授業での模擬授業が運動指導のための技術ポイントの理解の促進に効果をもたらしているという報告（松田他；2005）につながっていると推測される。

一方、「教材・教具の準備」と「安全の確保」は、それぞれ第3位、第4位にあげられているが、その割合には顕著な差がみられず、両者に分散した値を示している。また、第5位の「その他」をあげていた学生は極端に少なく約9%であった。

なお、各技毎に重視して検討した事項の分析を行ったが、各技とも重視して検討した事項の第1位に「運動課題の把握」を、第2位に「運動の仕方の説明・指示」をあげる学生が多く、前述の全体の傾向にそった結果を示していた。この結果は、本授業では実施された技の構造や模擬授業の実施順による顕著な差がなかったことを示していると考えられる。

本研究の調査方法は、指導者班で集まり順位を集約したものではなく、個々の学生が重視して検討したと考えた順位を回答する形式をとったので、必ずしも検討事項の明瞭な順位づけの結果が得られなかったが、以上のように模擬授業の計画・実施段階における学生の活動の全体的傾向を把握することができた。なお、学生による回答に差異がみられた要因として、模擬授業で担当した役割による影響があったのではないかと推測される。今後、模擬授業での役割分担と準備段階で力点をおいて検討した事項との関係を検討し、さらに学生の力量形成の実態について検討していく必要があると考えられる。

一方、ソフトバレーボールの模擬授業を計画・実施するにあたって重視した事項の順位については図2に示すとおりである。

ソフトバレーボールで重視して検討された事項順をあげると、第1位「運動課題の把握」、第2位「運動の仕方の説明・指示」、第3位「安全の確保」、第4位「教材・教具の準備」、「その他」

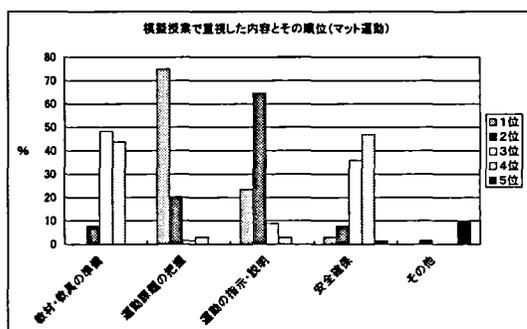


図1. 模擬授業で重視した事項（マット運動）

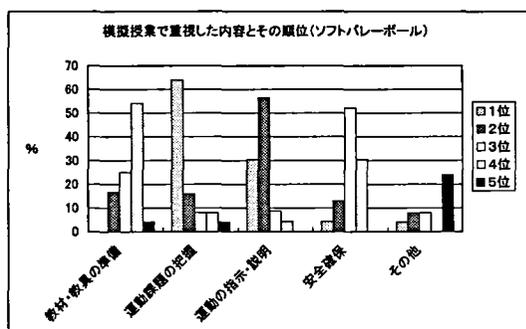


図2. 模擬授業で重視した事項（ソフトバレー）

の順となっていた。この結果をマット運動と比較してみると、第1位の「運動課題の把握」、および第2位の「運動の仕方の説明・指示」はマット運動と同様の結果を示しているものの、これらをあげている学生の割合はやや低い傾向がみられる。これは、マット運動では単一技を対象に指導していくことにしていたため、それら単一技の技能習熟が模擬授業の主要な目標に位置づけられ、「運動課題の把握」や「運動の指示・説明」の検討に向かいやすかったのではないかと考えられる。

また、第3位の「安全の確保」と第4位の「教材・教具の準備」の順位がマット運動とは逆転しており、またそれぞれの割合がマット運動よりも多い傾向がみられる。「安全の確保」の差異に関しては、マット運動の指導では、学習活動の場が限定され、学習者の活動がコントロールされやすいのと比べて、ソフトバレーボールでは練習時に学習者が同時に活動するため、接触や衝突等による怪我を防止することへの配慮や試合での怪我の防止のためのルール等の検討が必要になると考えたからではないかと思われる。

以上の他に、ソフトバレーボールでは「その他」をあげる学生がマット運動と比べて多く、約44%の学生が第1位から第5位までに検討したとしている。

2) 模擬授業を計画・実施するために検討した内容および実施後の反省・課題の記述事例

ここでは、模擬授業の計画・実施に向けて指導者班の学生によって検討されたそれぞれの事項の具体的な記述内容を事例として取り上げ、分析・考察していくことにする。抽出された記述内容は表2に示すとおりである。

① 模擬授業を計画・実施するために検討した内容の記述事例

まず、前項でみたように指導者班の学生全体で第1位にあげられていた「運動課題の把握」では、各指導者班の学生とも技(運動)の技術構造の理解と、できるようになるためのポイントについての検討がなされていたことが記述されている。例えば、前転の指導者班の学生は、「普段行っている小さな前転と授業でメインに扱う大きな前転との違いについて、まず班全員で理解することに重点をおいた。大きな前転はどこがポイントとなるのかをどのようにしたら学習者に気づいてもらえるかを実際に行いながら何度も検討した。大きな前転のポイントをきちんと理解しなければ小さな前転止まりになってしまうので、課題を理解してもらうことに力を入れた。」(アンダーライン部分は表1の抽出部分)と記述している。この事例にみられるように、大半の指導者班はまず指導の対象となる技の技術構造に対する理解を深めながら、各技ができるための主要な技術ポイントの把握と理解について検討が行われている。

ついで、模擬授業までに重視して検討した事項の第2位にあげられていた「運動の仕方の説明・指示」では、「運動課題の把握」で検討した技能習得に関する内容を、生徒班の学生に対してより具体的でわかりやすく提示していけるかどうかといった視点から検討されていることが記述されている。すなわち、どのような技術ポイントを設定し説明していけば、技能習熟に向けた学習者の意識的な活動内容となるかを中心に検討が行われている。一方、前転の指導者班の学生の記述にみられるように、「運動の回数の指示」についてや、ソフトバレーボールの指導者班の学生にみられるように「空間をどのように使ったら安全であるか」といった練習時の安全をどのように確保するかといった「安全の管理」に関する指示内容もここで検討されている。

また、「安全の確保」についての記述例をみると、すべての指導者班の学生が準備運動の内容を検討したことが記述されている。すなわち、運動の安全な実施のために準備運動で身体を十分に暖めるための内容の検討や、主運動で主に使われる身体部位の機能を高めておくことを検討したことが記述されている。一方、生徒班の学生に授業での場づくりを行わせることを想定した班(後転指導班の学生)では、運動の場づくりで注意・指示

運動指導の力量形成を視点とした模擬授業の検討（その2）

しておく事項が、またソフトバレーボール指導者班では練習の場での学習者同士の接触・衝突を防ぐための練習内容と場の使い方に関して検討した

ことが記述されている。

ついで、「教材・教具の準備」に関しては、本授業では、指導者班に運動の一連の動作を説明す

表1 模擬授業を行う上で事前に検討した事項と実施後の反省・改善すべき課題の記述事例

| カテゴリー | 事前に検討した事項の具体的記述例 | 実施後の反省・改善すべき課題の具体的記述例 |
|-------------|--|--|
| 運動課題の把握 | <p>(前転)：小さな前転と大きな前転の違いについての理解。大きな前転のポイントの理解。 (開脚前転)：班でできる人とできない人の差を比較した。次に開脚前転できれいに回るためのポイントを考えて。 (後転)：後転のしくみ、子どもが取り組みやすいように伝えるためのポイント。</p> <p>(側方倒立回転)：何がポイントなのか、どうしてそうすることできれいになるのかを考え、4つの課題設定を行った。 (ソフトバレーボール)：オーバーハンドバスのポイント理解。知識的な理解だけでなく、実際に動きながら理解。みんなが楽しんでバレーをするためにはどうするか。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 限られた時間の中で2つの前転をいれたのは欲張りすぎだったのかもしれない(指導内容の計画) ポイントの整理・定着を図る(教材の知識) 個別あるいは班指導の時間を増やし、上手な人ができない人に教えるのが望ましい(個人差に応じた指導法) 「ひざをひきつける」にはどういう意味があるのか、それによってどういう効果があったのかをもっと詳しく説明できればよかった(教材の知識と運動の説明。ゆりかごの段階をもっとふんで押すイメージをもってもらう(運動内容の計画)) 実際に技を指導するときに、ポイントが分かっている、どうアドバイスしたらいいか見つけるのが難しかった(技術指導での言葉かけ) 外からみた形よりも内からみてどうなる…というようにした方がポイントがわかりやすく、意識しやすい(運動の指導)。できない=楽しくないは絶対的ではないと思った(授業の目標と個人差) |
| 運動の仕方の説明・指示 | <p>(前転)：大きな前転の説明を動物歩きを用いて具体例を示しながらの方がわかりやすいのでは。3回とか2マット分とか具体的な回数を示す。 (開脚前転)：できている時とできていない時でどのような違いがあるかを見つけてもらう。 (後転)：ポイントをいくつもあげるのではなく子どもがその場で憶えられる程度の4つに絞った。上手なお手本を示すことで完成のイメージをもってもらった。 (側方倒立回転)：45分という限られた時間で、側転のポイントを何を利用して教えていくか。 (ソフトバレーボール)：どのようにポイントの説明したら分かりやすいか、文章化する。ポイントを理解させるための練習方法。空間をどのように使ったら安全であるか</p> | <ul style="list-style-type: none"> 動物歩きにあんなに時間をかけなくてもよかったと思う(指導内容の計画) 具体的な回数で示すようにしたのはスムーズに授業を進める上で大切だった(具体的な運動の指示) 発表者(生徒役の人)が何を意図して発表しているかをよく聞き、考えてからまとめる(発問と運動理解の促進) ポイントをおさえないと、どのようになってしまうのかの具体的なイメージがうかびにくかったようだった(運動理解の促進) できれば失敗例を見せ、ポイントをおさえることのように改善できると提示できるのがよいと考える(失敗例の示範) 側転には、様々な練習方法がある。臨機応変に対応できる姿勢をもちたい(教材の知識) 例えを使う場合はいくつか考えておいた方がよいと思った(運動理解の促進) 体を動かしてみても違いを見つけさせるとよい 人数と場所を考えて空間を仕切るかなど検討したら良い(安全の管理) |
| 安全の確保 | <p>(前転)：準備運動をしっかりと行うように計画した。 (開脚前転)：準備運動を念入りに行おうと思いい、柔軟も取り入れた。 (後転)：マットの耳を入れる。マットの出し入れを班で行うよう指示。体を温めるために走った。 (側方倒立回転)：ウォーミングアップのためにその場で走ることに。 (ソフトバレーボール)：運動をする向きや回数の考慮。準備運動で重点的に動かす部位の検討。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 寒いときにはランニングなどの運動も(準備運動)・説明が長すぎると冷えさせてしまう(運動環境と活動中の安全への配慮) 準備運動のテンポが早かった。もっとゆっくり念入りに行う(準備運動の具体的な指導法) 安全面への指示が少なかった。危険な場面を想定しておき、生徒に伝えておく(安全管理への配慮) よく使う部位を準備運動でしっかりするようにしておけばよかった。整理運動をすべきだった(準備・整理運動) せつかく体を暖めたのに、ポイントの説明が長く冷えてしまった。技をする前に「手首、足首を回してね」などの声かけをすべきだった(運動環境と活動中の安全への配慮) 授業全体の時間を考えて(運動の場の使い方)を設けるべきだった(活動中の安全への配慮)。準備運動は、決まったパターン+重視する部位でやればよかった(準備運動) |
| 教材・教具の準備 | <p>(前転)：よく理解していなかった。 (開脚前転)：マットはグループ活動の一環として(事前に)あえて出さなかった。 (後転)：ワークシートを練習中に取り入れることにした。後転の一連の動作を図示し、説明を加えた。 (側方倒立回転)：ワークシートを使うのか、授業の流れを前に書いておく必要性はあるか。 (ソフトバレーボール)：視覚的に分かりやすくするために、いろいろな道具を使ったり作ったりした。</p> | <ul style="list-style-type: none"> もっといろいろなことを想定して準備しなければならない(教具の準備) 目線や手をおく位置が分かりづらかった。カラーテープ等を用いればよかった(教具の準備) ワークシートを十分に活用することができなかった。使い方ももっと詳しく伝えることができればよかった。ことばの選び方ももっと考えるべきだった(ワークシートの活用) ワークシートは、生徒が振り返ったり、教師のアドバイス、評価のためにも良いと思う。互いに見合ったりアドバイスしあったりしやすい雰囲気づくりを(ワークシートの活用) 視覚的な材料であったとしても、それを意識の中に入れるきっかけとなることばが必要だと思った(運動の説明の仕方) |
| その他 | <p>(前転)：授業の時間をキツキツの時間配分にした。 (ソフトバレーボール)：授業の目標設定するの、何を教えようとしたのか</p> | <ul style="list-style-type: none"> 指導内容と時間との調整にもっと気をつけなければならない(指導内容の計画) 具体的な目標ではなく、抽象的なものにしてしまったため目標がない授業ようになってしまった(授業の目標) |

るための図や文章を模造紙に書いて提示すること、学習カード（ワークシート）を作成し、授業で使用することの2つを事前に準備することを課題にしていた。これに関して、1時間目：前転、2時間目：開脚前転の指導者班の学生ではこれに関する記述はなされていない。しかし、3時間目以降の指導者班の学生ではその準備に向けて検討が行われた記述がなされている。これらの事例からみれば、本授業では模擬授業に向けて指導者班で事前に検討しておくべき事項として教材・教具をあげていたが、教材・教具の事前の準備の重要性は、実際に何回か授業経験を積みながら理解されていく事項なのかも知れない。

以上のように、模擬授業の実施までに各指導者班で検討された事項を記述事例を通してみてきた。その結果、「運動課題の把握」と「運動の仕方の説明・指示」の事項は相互に関連させながら検討が行われているという実態が得られた。また、安全の確保では、準備運動の内容の検討を中心としながら、授業の場の準備方法や指導内容との関係でも検討がなされているという結果が得られた。一方、教材・教具の準備に関しては、授業の後半の指導者班になるにつれその記述がなされていたことから、模擬授業を重ねながらその重要度が理解できるのではないかということが推測された。

② 模擬授業実施後の反省や改善すべき課題についての記述事例

模擬授業を行って試みの反省や改善すべき課題についての記述事例は表1のとおりである。なお、かっこ内に表記している内容は、村井他（2007）が模擬授業後の反省についての記述内容をカテゴリーに分類する際に用いた用語を参考にした。記述されている内容は、もちろん模擬授業を実施しながら気づいたものもあれば、模擬授業終了後の反省会を通して気づいたものも含まれている。それぞれの事項で多様な内容が記述されているが、これらの記述内容全体をみると、問題の解決よりも、問題の発見に向けられた記述が多くみられる。木原（1998）によると、初心者の方では問題点への認識と、そのレパートリーの拡大による経験の蓄積の重要性が指摘されているが、大学生が初めて行った模擬授業で得られた上述の反省の傾向は、何が問題であったかといった問題

点とそこでの課題の把握にまず目が向けられたものであるといえよう。以下、それぞれの事項についてみていくことにする。

まず、「運動課題の把握」では、「ポイントの整理・定着を図る」といった記述にみられるように、指導の対象となる技を技能差に応じて指導するための「教材の知識」の不足や、取り上げた技のポイントをもっと詳しく説明していくための「教材の知識と運動の説明」に関する内容があげられている。また、設定した技術的ポイントをもとにどのように具体的に指導を行うかといった「技術指導での言葉かけ」、あるいは「個人差に応じた指導法」などの技術指導に関する内容が多く記述されている。また、技術指導と関連する内容として、与えられた時間内に指導したい内容が指導できるように精選されていなかったという「指導内容の計画」についても記述がなされていた。

また、「運動の仕方の説明・指示」では、事前の計画段階で検討の中心となっていた生徒役の学生に対してより具体的でわかりやすく提示していかどうかといった課題をふまえた記述が多くなされている傾向がみられる。これは、「運動の説明・指示」にかかわる事項が生徒役の学生に対して直接提示していく内容であることから、事前にその検討が具体的にされていたため、模擬授業を通して実際それらがどうだったかという反省点や問題点の把握に結びつけやすかったためではないかと思われる。これらでは、学習者の運動理解を促進するための内容・方法のさらなる検討が課題として残ったことが記述されている。一方、「具体的な回数で示すようにしたのはスムーズに授業を進める上で大切だった」という「具体的な運動の指示」について肯定的な記述もみられた。ともすれば、模擬授業後には反省点や改善すべき課題ばかりが出現しやすいが、力量形成を視点としてみれば、この記述例にみられるように授業で意図した事項がうまく作用したことも含めて、実施された模擬授業を振り返っていく必要がある。

さらに、「安全の確保」では、特に寒い時期に模擬授業が実施されたこともあって、導入時の準備運動の内容についての課題が残ったことに加えて、運動の説明等の時間をできるだけ少なくするという「運動環境と活動中の安全への配慮」が記述されていた。また、「安全についての指示」

が少なかったことや、運動の場の使い方との関係から「活動中の安全への配慮」について課題が残ったという記述がみられた。

「教材・教具の準備」では、運動理解をより促進するための教具（テープ）の準備不足や、準備した模造紙やワークシートが十分に活用できなかったといった「運動の説明の仕方」や「ワークシートの活用」などが課題として残ったことなどが記述されていた。

5. おわりに

本研究は、体育科学習材講義において実施されたマット運動およびソフトバレーボールの模擬授業を計画・実施していくうえで、学生がどのような事項に力点を置いて順次検討しているかの実態と、その具体的な検討内容および模擬授業を行っての反省等を記述事例から把握することを目的とした。

その結果、模擬授業を計画・実施していくために指導者班の学生が重視した事項順は、マット運動、ソフトバレーボールともに、第1に「運動課題の把握」が、ついで「運動の仕方の指示・説明」があげられていた。一方、「教材・教具の準備」と「安全の確保」については、マット運動とソフトバレーボールでやや異なる傾向がみられ、ソフトバレーボール指導者班では、「安全の確保」を第3位に、マット運動では第4位にあげる学生が多い傾向がみられた。

また、模擬授業の実施までに各指導者班で検討された具体的内容を任意の学生の記述事例のもとに検討した。その結果、「運動課題の把握」と「運動の仕方の説明・指示」の事項を相互に関連させながら指導内容の検討がなされているという実態や、安全の確保では、準備運動の検討を中心としながら、授業の場の準備方法や指導内容との関係で検討がなされているという実態が明らかになった。一方、教材・教具の準備に関しては、授業の後半の指導者班になるにつれこれに関する記述がなされていたことから、模擬授業を重ねながらその重要度が理解できるのではないかということが推測された。

さらに、模擬授業を行って試みの反省や改善すべき課題については、それぞれの事項について、

あるいは他の事項との関連で多様な内容が記述されていた。これらの多くは模擬授業の実践を通してはじめて気づく内容であるともいえよう。

本授業は模擬授業を取り入れて実施してきているが、その目的は前述したように、学生に直接的な指導経験を積ませることによって指導者側に立って授業を考えていくといった意識の転換を図ることと、運動の技術指導に関する基礎的な知識や方法の検討を核にしながらい体育科の指導に対する理解を深めていくことにある。前者の目的については、本研究ではデータとして実証的に検討していないが、後者については「運動課題の把握」や「運動の仕方の指示・説明」などが事前の検討事項の上位にあげられていたことから、学生が運動の技術指導に関する知識や方法の検討をもとに活動を行い、さらに模擬授業後の反省会を通して体育科の指導に対する理解を深化・拡大していく契機となっているのではないかと考えられる。

今回の研究では、事前に検討された具体的内容や模擬授業を行って試み後の反省、改善すべき課題等については任意の学生を取り上げ事例的に検討したにすぎず、その全体像を把握することはできなかった。今後の課題としたい。

参考文献

1. 木原成一郎他（2004）「教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究（その2）」学校教育実践学研究 第10巻, pp.1-10.
2. 松田泰定他（1995）「初等体育の授業改善に関する研究」学校教育実践学研究 第1巻, pp.9-15
3. 東川安雄他（1996）「体育指導の力量形成に関する調査研究—小学校現職教員を対象として」学校教育実践学研究 第2号, pp.1-10.
4. 松田泰定他（2005）「運動指導の力量形成を視点とした模擬授業の検討」学校教育実践学研究 第11巻, pp.45-50.
5. 木原俊行（1998）「自分の授業を伝える—対話と成長」浅田匡他編著『成長する教師—教師学へのいざない』金子書房, pp.185-196.
6. 村井 潤他（2007）「教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究」日本体育学会第58回大会予稿集, p.326.